研究所を情報の発信地に

原爆放射能医学研究所長　藏本　淳

昭和36年発足した本研究所も前身の医学部施設から数えれば30年を迎えようとしています。その任務は言うまでもなく原爆被爆者における放射線障害の長期にわたる影響を明らかにして適切な救済措置，健康管理体制を樹立することです。

この間，関係各位の御理解と御協力のお陰で今や25万人にのぼる被爆者のデータベースが整備され，疫学的，情報処理科学的な解析もなされてきました。一方，原爆を再現した動物でのガンマ線，中性子線などによる照射実験の業績も集積され，人体の病理解剖資料，血液標本，残留放射能検出用の資料なども整理されました。これから新しいソフトプログラム，新しいバイオテクノロジーを導入しそれを駆使して，例えばフォルマリン漬の癌細胞から，DNA，癌遺伝子産物を検索する方法が検討されています。既存の部門を越えた研究テーマ，プロジェクトが生まれ，古い革袋の中ですでに活発な醗酵が始まっており，いまや整備，発展の時期から，開花，結実の時期を迎えようとしています。

これまでに達成された調査研究の成果は，学術的に練りあげて批判に耐える明晰さと，その意図と重要性が伝わる説得力を持たせなければいけないのでしょう。原爆体験の風化が叫ばれている中で，原子力エネルギーに支えられた文化生活の信仰も身辺にしのび寄る放射能汚染によって揺らぎかねない状況です。分子生物学，放射線物理化学，基礎医学，社会医学及び臨床医学の10部門を抱える研究所の特色を活かしながら核エネルギー，地球汚染といった人類の運命にコミットした有効な情報と，研究者の意志を発信してゆく研究所となるよう，その運営に微力をそそぐつもりです。

一方，21世紀に通用する新しいビジョンの大学構想を描きながら霞キャンパスの再開発計画が検討されています。医・歯・薬との連係も，より密接なものとなりましょう。若い研究者の参加と学内関連諸施設ならびに各位の御支援を願うものです。